# 第３節　食べ物への興味や関心をもつ

幼児は、食べる喜びや楽しさを味わうことや、食に関わる経験を通して諸感覚を刺激されながら興味関心を高めていく。幼児期に野菜や果実などを育てたり、調理に関わったりすることで、幼児なりに食べ物を大切にする気持ちや、用意してくれる人々への感謝の気持ちが芽生え、食の大切さに気付いていくことにつながる。教師は、幼児にこのような体験をとおして、食べ物への興味や関心を高め、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにしたり、和やかな雰囲気で食事をし、皆で一緒に食べると楽しくておいしいと感じる体験を積み重ねていけるようにしたりすることが重要である。

ここでは、２年保育４歳児の実践事例を述べる。野菜の栽培活動を通して食べ物に興味関心をもつ姿（事例１「早く大きくならないかな」)、給食調理員さんの手伝いを意欲的に行う姿（事例２「調理員さんの手伝いをしよう」)、先生や友達と一緒に食べることを楽しむ姿（事例３「さつまいもパーティーをしよう」）を取り上げる。

（関連資料:「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成３１年３月埼玉県教育委員会）Ｐ５６～Ｐ５９）

## １　幼児の実態（２年保育４歳児クラス　１３名）

入園して１ヶ月、毎日の給食でたくさんの野菜に触れるようになったことや、敷地内で育てられているキャベツやにんじん、じゃがいもの生長などを見ることで、少しずつ野菜に興味をもつようになってきた。「野菜は嫌い」「食べたくない」と言う幼児の姿もあるが、「苦手でも食べてみようかな」という気持ちももち始めている。

５月初め、家庭で野菜の苗植えをした Ａ 児の話をきっかけに、「私たちもやってみたい」という声が聞かれるようになった。皆で育てることを決め、育てたい野菜や世話の仕方を話し合ううちに、野菜の栽培や収穫を楽しみにする姿が見られるようになった。

野菜の生長に興味や関心をもち始めた幼児に、自分たちの力で野菜を育てたり調理したりする体験をとおして、食べることへの興味や関心を高めたい。

## ２　指導のねらい

・身近な野菜を育てる体験や収穫をとおして、食べることに興味や関心をもつ。（事例１）
・給食作りの手伝いを体験し、食べ物や食に関わる人への感謝の気持ちをもつ。（事例２）
・収穫した野菜を調理して、皆で食べることを楽しむ。（事例３）

## ３　指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

・幼稚園生活の中で，充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ，見通しをもって行動し，自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（１)「健康な心と体」］

・家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに，地域の身近な人と触れ合う中で，人の様々な関わり方に気付き，相手の気持ちを考えて関わり，自分が役に立つ喜びを感じ，地域に親しみをもつようになる。また，幼稚園内外の様々な環境に関わる中で，

遊びや生活に必要な情報を取り入れ，情報に基づき判断したり，情報を伝え合ったり，活用したりするなど，情報を役立てながら活動するようになるとともに，公共の施設を大切に利用するなどして，社会とのつながりなどを意識するようになる。

［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（５）「社会生活との関わり」］

・自然に触れて感動する体験を通して，自然の変化などを感じ取り，好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら，身近な事象への関心が高まるとともに，自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また，身近な動植物に心を動かされる中で，生命の不思議さや尊さに気付き，身近な動植物への接し方を考え，命あるものとしていたわり，大切にする気持ちをもって関わるようになる。

［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（７）「自然との関わり・生命尊重」］

## ４　内容

・野菜の栽培をしながら、食べ物の様子や変化を観察する。（事例１）
・身近な食べ物に親しみながら、食べ物に関わる人に接する。（事例２）
・先生や友達と協力して調理し、皆で作ったものを食べる。（事例３）

## ５　環境構成のポイント

・観察を継続的に行えるように、身近な場所（園庭のプランターや隣接する畑）で栽培をする。（事例１）
・絵本や図鑑などで得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどし、幼児の情報との出会いを作っていく。その際、幼児の気付きや自分で調べたこと、遊びの経過やそこで発見したことなどを、絵や写真等で継続的に観察し掲示する機会や場を設ける。（事例１・２・３）
・本物の食材と道具を使って調理を体験できる場を設ける。その際、難しい調理ではなく、幼児が「自分でやった」という達成感が味わえるような調理方法や内容にする。（事例２・３）
・友達と一緒に収穫した野菜を皆で一緒に食べる楽しさや嬉しさが味わえるように場を設定する。（事例３）
・便りや掲示、降園時の連絡などで、体験したことや幼児の姿を保護者に伝え、家庭生活とつなげる。（事例１・２・３）

## ６　活動の展開と評価

### ⑴　事例１　早く大きくならないかな（５月上旬）

夏野菜の苗を植える前に、皆でじっくり観察してみることにした。「これは何の野菜の苗かな？」という教師の問いかけに、触ってみたり、においをかいだりしながらじっくりと観察をしている。

Ａ児「紫色の花が咲いているから、これはなすの苗だね。」

Ｂ児「きゅうりの苗はどれだろう。緑色の花は咲いていないね。」

Ｃ児「この苗の花は黄色いけれど、トマトのにおいがするよ。きっとトマトの苗だ。」

なす、きゅうり、ピーマン、トマトの苗を囲みながら、自分達の思ったことを発言

していく。その後、自分で植えたい苗を選び、畑やプランターに土や腐葉土を入れて準備し苗植えをした。幼児が継続して観察や世話ができるように、苗植えをしたプランターを目のつきやすい位置に置き、個人用のじょうろも用意した。毎朝水やりをしながら野菜の生長を楽しみにしている様子がある。

数日後、

Ｄ児「先生、赤ちゃんきゅうりができているよ。」

Ｅ児「かわいいね。早く大きくならないかな。」

Ｂ児「この黄色いのがきゅうりの花だったんだね。」

Ｃ児「他の野菜にも赤ちゃんできているかな。見てみよう。」

幼児の気付きや生長の様子を記録して掲示したり、学級内で知らせ合う機会を設けたりした。毎朝水やりをしながら収穫の日を楽しみにしている。

Ｄ児「きゅうりが大きくなったよ。」

Ｂ児「なんだかとげとげしているね。触るとちくちくする。」

Ａ児「ちくちくしているのは新鮮な証拠なんだって。」

教師「おいしそうだね。もう食べられるかな。」

Ｂ児「もっと大きくなりそうだよ。今採ったらかわいそう。」

Ｃ児「そうだね、もう少し待とう。あと一日かな、二日かな。」

Ａ児「早く食べたいな。楽しみだね。」

毎日水やりをしながら、観察を続ける。

Ｄ児「ちょうどよい大きさになったんじゃない？」

Ａ児「そうだね。おいしそう。」

皆が納得する大きさになるまで待ってから収穫をした。

収穫時はとても嬉しそうで、「私たちが育てた野菜だよ。」と、自慢げに皆に見せて回っていた。

**○事例１に対する評価**

（幼児理解）

幼児の会話から、毎日水やりなどの世話をしたことで野菜への愛情が育っていることが感じられる。「私たちが育てた野菜」という言葉から、「自分も何かを育てることができる」という自己効力感の高まりも感じられる。

（教師の指導）

毎日観察ができる場所で栽培したことで、小さな変化にも気付き、野菜の生長を喜ぶ姿があった。教師が幼児の発する言葉を大切にすることで、感じたことをのびのびと表現することができた。きゅうりの触感やトマトのにおいなどへの気付きを皆で共有することは、他の幼児にも刺激となり、野菜の生長に興味関心を示す幼児が増えていった。

### ⑵　事例２　調理員さんの手伝いをしよう（６月下旬）

入園から２カ月ほどたち給食に慣れてきた頃、「調理員さんは毎日何人分の給食を作っているのだろう」ということが話題になった。幼稚園、小学校の給食を合わせると

その数が５００食以上だということを聞くと皆驚き、「調理員さんが大変だからお手伝いをしよう」ということになり、旬の食材であるとうもろこしの皮むきの手伝いをすることになった。

Ｆ児「皮の洋服をたくさんきているんだね。たけのこみたい。」

Ｇ児「おひげを全部取るのが難しいね。」

教師「全部きれいに取ると、調理員さんがすぐに調理できるから嬉しいんだって。おひげがついていると食べにくいから、いつもきれいに取ってくれているんだよ。」

Ｈ児「調理員さんは毎日大変なんだね。きれいにとるぞ。」

Ｆ児「今日の給食で皆が食べるんでしょ？小学生も？園長先生も？」

教師「皆食べるよ。皆、今日の給食を楽しみにしているよ。」

Ｉ児「それなら、たくさんむかなきゃね。みんなのためにがんばろう。」

幼児は、一つ一つ丁寧に皮むきをした。むき終わると、自分たちで届けたいという意見が出され、年長組の当番が運ぶことになった。「たくさんあるから、重たいけどがんばって。」「調理員さんに渡してきてね。」と、嬉しそうに声をかけていた。給食の時間まで「いい匂いがしてきた。」と話したり、給食室を度々覗いたりしながらとても楽しみにしている。給食の時間になり、おいしそうなとうもろこしが配膳された。

Ｇ児「僕たちがむいたとうもろこしだ。」

Ｆ児「おいしいね。調理員さん、おいしくしてくれてありがとう。」

Ｈ児「本当だ！おいしいね。私、初めて食べられたよ。」

普段苦手で食べようとしないＨ児も進んで口にし、「おいしい」と、満足そうな表情を浮かべていた。小学校の放送や掲示板でも「幼稚園のみなさんが給食のとうもろこしの皮むきをしてくれました。」と紹介され、とても嬉しそうだった。教師や小学校の児童に「とうもろこし食べたよ。」と声を掛けられて満足そうな表情を浮かべていた。

**○事例２に対する評価**

（幼児理解）

「調理員さんの手伝いをする」ということをとても喜び、「給食を食べる皆のためにがんばろう」「調理員さんが大変だから手伝おう」という思いで主体的に活動していた。調理に関わることや、友達が「おいしい」と喜んで食べている姿から自分も食べてみようという幼児の思いの変容も見られた。また、いろいろな人に「ありがとう」「助かったよ」と声を掛けてもらうことで、さらに満足感を感じる姿もあった。調理前の食材に触れたことも、食べ物への興味関心を深めることとなった。

（教師の指導）

幼児の気付きや思いを認め受け止めながら、調理員さんの手伝いをすることや食べることに期待をもてるようにした。皆の役に立っているということやいつも調理をしてくれる人々の気持ちを伝えることで、さらに関心が深まった。これまで、食べることが中心だった給食が、「誰かのためにやってみたい」「自分たちでや

ってみよう」と心を動かし、主体的に関わることができたと考える。

### ⑶　事例３　さつまいもパーティーをしよう（１０月下旬）

１学期に、収穫したじゃがいもを使って年長組が調理をし、カレーパーティーを開いてくれた。１０月にさつまいもの収穫をした際、皆でさつまいもを食べたいという声が上がり、家に持ち帰って家族と食べる分と、幼稚園で調理をして「さつまいもパーティー」を開いて食べる分とに分けることにした。

幼児が、自分たちで調理ができるように、調理内容や調理道具を配慮し、さつまいもの茶巾づくりをすることになり、さつまいもを洗ってつぶしたり、味付けや成形したりすることを幼児が行った。

Ｊ児「皮をむいたさつまいもは白かったのに、ゆでたら黄色くなったよ。」
Ｋ児「おいしいにおいがするね。甘いにおいだね。」
Ｌ児「さつまいもを潰すのって力がいるんだね。」
Ｊ児「熱い。なかなか難しいね。お母さんもいつも大変なんだね。」
Ｋ児「おいしくなーれ。おいしくなーれ。」

試行錯誤しながら友達と協力して作り上げ、可愛いお皿やナフキンに飾り付けてから皆で食べた。

Ｊ児「ハロウィンパーティー楽しいね。」
Ｍ児「甘くておいしいね。他の先生たちにもあげたいな。」
Ｎ児「おいしいからお母さんにも作り方を教えてあげよう。」

その後、他の先生に届けておやつに食べてもらった。保護者には、降園時に幼児の様子やレシピを伝えた。後日、保護者から「子供と一緒に茶巾を作ってみました。」「家でもさつまいもをおいしく食べました。」という話が多く聞かれた。

**○事例３に対する評価**

（幼児理解）

自分で調理することで諸感覚が働き、さつまいもの様子の変化を感じ取り、加熱前と加熱後の変化に気付く姿が見られた。また、調理員さんやお母さんなど、いつも自分のために調理してくれる人への感謝の気持ちをもつことができた。自分たちで育て収穫した野菜を調理し作り上げたことは、「自分でできた」という喜びや自信となり、「食べてみたい」「他の人にも食べてもらいたい」「作り方を教えてあげたい」という姿につながった。

（教師の指導・家庭との連携）

さつまいもを収穫するだけでなく、栽培から収穫、調理して食べるプロセスを経験できるようにしたことで、食べる喜びや楽しみ、食への興味関心を高めることになったと感じられる。収穫物を家に持ち帰ったり、幼児の姿を保護者に伝えたりすることで、家庭での食育にもつなげることができた。

## ７　評価を踏まえた指導計画の改善

### ⑴　短期の指導計画の改善

野菜の栽培を行うことは、幼児が食と自然のつながりを実感できる絶好の機会とな

り、食べ物を作ることの大切さを理解させ、食べ物の命をいただくことへの感謝の気持ちを育てることにつながる。世話や観察がしやすいように、身近な場所で栽培できる環境を整えることで興味や関心の継続につながり、収穫に向けて期待感をもったり、主体的に関わろうとしたりする姿に結びつく。

収穫した野菜は、幼児の発達や興味関心に合わせて、食べ方や調理方法を検討し、体験できるようにする。

また、幼児が自ら進んで食べることを楽しむためには、教師や友達との温かい人間関係づくりが基盤となる。遊びや生活、行事などを通していろいろな食べ物に対する興味や関心がもてるように言葉を掛けたり、和やかな雰囲気で食事を楽しめるように援助したりすることが大切である。また、食べ物への興味や関心を高めるため、教師は、幼児の言葉による伝え合いが広がる雰囲気づくりや、幼児の野菜の生長や収穫を喜ぶ気持ちに共感していくようにしていく。

**⑵　長期の指導計画の改善**

友達や教師と一緒に野菜の栽培をすることは、野菜を身近なものに感じるきっかけになる。種から育てる野菜や苗から育てる野菜、花が実になる野菜や茎や根が膨らんで食べられている野菜など、様々な野菜に触れられるように年間を通して計画していく。

生活の中や絵本、図鑑などで食べ物を知ったり、実際に栽培、収穫、調理、制作遊びをするなどして、連続性のある計画を立てることも大切である。行事食や郷土料理、地場産物、旬の食べ物などを幼児に触れさせることも、食べ物の理解や興味関心を深めることになるため、計画的に取り入れていきたい。